

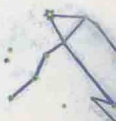
げきとつかぞく

激突家族

井上家に生まれて

石川麻矢

Ishikawa Maya



げきとつかぞく

激突家族

井上家に生まれて

石川麻矢

Ishikawa Maya



激突家族——井上家に生まれて

一九九八年 五月三〇日初版印刷
一九九八年 六月七 日初版発行

著 者 石川 麻矢

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

郵便番号 一〇四・八三二〇

東京都中央区京橋二一八・七

電話 販売部 〇三・三五六三・一四三二

編集部 〇三・三五六三・三六六六

振替 〇〇・一一〇・四・三四

印刷・製本 大日本印刷

© 1998 Maya Ishikawa/CHUOKORON-SHA, Inc.
Printed in Japan ISBN4-12-002801-1 C0095

定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい
送料小社負担にてお取り替えいたします

激突家族——井上家に生まれて

目次

とても大切な電話 9

母の恋人 9

ショックという贈り物 12

初恋の相手は編集者 18

マージャン大会 21

一家でオーストラリアへ 26

原色の町 26

初めてのお招き 29

父と母の喧嘩 33

神経性胃炎 39

父と私の野球関係 43

ティースプーン 43

野球少女 46

卓球部に入る 51

父と母の夢 54

五つの血の行方 57

二人の美人祖母 57

粹なじいくん 61

「土地柄戦争」 64

父と母は「兄弟星」 67

三人三様の進路 69

父の書斎の明かり 69

あーちゃんの留年 74

「あと二、三発殴られてください」 76

旅館になったわが家 79

父と母の夢、私の夢 81

あーちゃんに教えを乞う 81

マイペースの友達 83

映画館に通う 86

フランスをめざして 89

一人フランスへ 94

「ロンドン日帰りツアー」 94

母の異変 97

留学計画を告白 99

的中した第六感 102

花の都の現実 107

スリッパで第一歩 107

灰色のバリ 111

初めての嫉妬 114

あーちゃんの贈り物 118

不思議な縁 120

買い食いでストレス解消

120

家庭教師のニコル

125

ホームステイ先へ

127

パリで迎えた誕生日

132

キックボクサーの夢破れ

132

日課は公園通い

137

誕生日のプレゼント

139

一人きりの恋の街

144

「金縁君」と私

144

もててもてて仕方がない

147

アランとの会話

151

変な手紙

153

父と母への宣戦布告

157

私の怒り

157

コスモスの花

164

中途半端でも日本へ 169

母への手紙 169

私なりの十九歳 173

日本に帰ろう 177

そして二人になった 181

母の新しい家 181

父との間にできた壁 187

市川の家にさようなら 189

救世主の誕生 193

私たちの時代 197

初めての証書 197

二人の岸さん 200

満天の星の下で 205

あとがき 212

激突家族

——井上家に生まれて

とても大切な電話

母の恋人

母に恋人を紹介されるのは、二度目のことで、私は驚きもしなかったし、何も感じなかった。本当に今度こそ素敵な人で、幸せになってほしいと思った。

私は、父の結婚式にも、母の結婚式にも出席している。それぞれの結婚式の前夜に、星を見てなかなか眠れなかったことも、不思議にも涙が出てきたことも、たぶん、父も母も知らない。

小さい頃の父と母（井上ひさし・好子）は、いつも戦っているように見えた。

それは日常のどんな些細なこと、たとえば「昼ご飯を何にするか」とか、『刑事コロンボ』をどの部屋のテレビでどういう状態で見えるか』ということに対しても、真剣に彼らは戦う。それは、父と母が喧嘩をしているという意味ではなく、真面目に彼らは考えるのだ。決して「まあ、適当

なところだ」とか「どこだっていいじゃない」などとは言わない。

もちろんそれは日常のことだけでなく、父と母は世間にもいつも何かを仕かけていた。新聞のどんな小さな事件にも、政治にも、人間が仕出かすひとつひとつの事件に怒ったり、感動したりしては、戦いを、行動を起こす時をじつと待っているような過激な人たちだった。

父は「書く」ことで、母は、父の作品を武器にして、感情のままに生きていた。若かった彼らは、私を含む三人の娘を作ったけれど、本当は子供など持つてはいけないエネルギーの持ち主だったように思う。彼らは、自分の個性を、仕事を、いつも前面にかかげて生きてきたし、今もそれは変わらない。

親を踏み台にして歩いていく子供はいるが、わが家の場合は反対で、子供を踏み台どころか踏みつけて踏みつけて前に進んでいく稀な親なのだ。

母の恋人宣言からしばらくして、私は母の恋人だというその人に会った。目の細い、肩幅のしまった、スーツ姿のその人は、低い優しい声で「大丈夫だよ」と私に言った。私はなぜだかその人に好感を持った。まだ自分の本当の父親が死んでもいないのに、その人を新しいパパだと思い、その人の名刺をお守りのようにして持ち歩いた。

その人がどのように人生を歩いてきたかを母から聞くにつれ、その人に、私と同年で、同じ月の生まれで、おまけに顔まで似ているらしいひとり息子がいることを知った。私には姉が二人いるけれど、その姉たちに感じたことのない親近感を覚えた。会ったことも、話したこともない

けれど、おまけに彼はアメリカ育ちで、言葉も通じないかもしれないが、私には同志のように思われて仕方ないのだ。

難しいことを易しく、易しいことを深くと父は言うが、人と人との間はそんなに易しく物を書くようには整理できない。感情を殺して、我慢をしながら、傷つきながら、父と母のことを私は見つめている。秩序のない家庭であつても、私には懐かしい家の匂いが今でも忘れられない。

知人の家に遊びに行つて玄関を開けた時の独特な匂いに、昔の私たちの生活がよみがえつて、涙が出てきてしまう。悲しいとかそんな感情ではなくて、思いがけない涙が出てくる。そこに浮かび上がる若い頃の父と母の顔が、キラキラと眩しくて仕方がなくなる。父も母も仲良く手をつないで、本当に楽しそうに歯を見せていつも笑っている。

父と母が離婚するなどということは私にはとても考えられなかった。父と母は、映画『風と共に去りぬ』のスカーレット・オハラとレット・バトラーだと思つていたからだ。もちろん、年代も容姿も時代も国籍も、彼らとはあまりにも違うけれど、一つだけ共通しているのは、お互いにあれだけ個性が強いと、他の人には手に負えないというところだ。

父は、自分の身を削つて作品を書いている。それは『鶴の恩返し』のお話のように、自分の羽を一本ずつむしつて機織りするのと同じ作業の繰り返しで、お風呂にも入らず、食事もとらずに生活していた。父は、神様から「書く」という才能をもらつて生きている変わり者だ。

母は、それに輪をかけてエネルギーの塊みたいな人だから、普通の男の人の奥さんになるのは、

たぶん無理だと思っていた。だからこの映画のように、離婚が決まってもいつかまたお互いのところに戻ってくるような気がしていた。

そんな気持ちは、もうそんなことありえないとわかっている今でも、私の中ではまだ消せないでいる。

ショックという贈り物

子供の頃の毎日は、今思い出してもとても楽しく、何から何まで普通の家庭とは違っていた。確かに違っていたけれど、父と母には家庭というものに対しても、子供のことに對しても、一つの道みtainなものが確かにあった。父も母も、興味のあるものに対しては徹底的に後押しをしてくれた。

まだ、子供の頃の私は、歌謡曲がとても好きで、特にちあきなおみが大好きだった。その頃のシングルレコードは一枚五百円で、父は私のために、いつも一万円ぐらいは軽く使ってしまう。一度に、しかも子供に、一万円分のシングルレコードを買う客も珍しく、店員さんもとて**び**っくりしていた。

父に言わせると、私は一番良い時に生まれたらしい。物心ついた時には、もう経済的にもとても恵まれていたし、寂しい思いなどしたことがない。姉二人に対してはこうはいかなかったよう

で、一番上の姉のみーちゃん（長姉・都）など、美しいが貧しい若い頃の父と母が、記憶のどこかにいるらしい。

父が直木賞をもらった時のことは、とてもよく覚えている。

私たち三姉妹は「とても大切な電話」というのを母と待っていた。電話が鳴って、お礼を言つて、母は突然冷蔵庫に走った。中からキャベツを取り出すと、ザクザクと切つて私たちに焼きそばを作った。その時のキャベツひとかけの大きさが、小さい私たちの口にはとても大きくて、本当に大変だった。

その時に頂いた受賞の記念の時計は、二番目の姉あーちゃん（次姉・綾）がもらった。あーちゃんはその時計を、足首につけた。手首だとくるくる回つてしまうからで、学校に行く時も、眠る時も、ずつとつけていた。学校の先生に見つかつて怒られても、靴下で隠してがんばっていた。直木賞をもらつてから、父と母の子供たちへの後押しはいつそう強力になった。

父と母は、小さい私たちをよく映画に連れていってくれた。行く先は、その頃は毎回浅草で、みんなで浅草の町を歩いた。

その頃の浅草には、見世物小屋がいっぱいあって、ニワトリを丸ごと食べるきれいな女の人や、へビに話しかける背の小さい男の人がいた。私たちは、瞬きもせずその見世物を観たために、鶏肉が食べられなくなった。

浅草という町は、あの頃の父と母にとっても似合つていた。商店街を飾る、偽物の造花のような

町だった。

私は、四歳ぐらいの時から二年間、父と口をきかなかった時期がある。長引いた理由はよく覚えていないが、そのことは今になっても、お互いの心のしこりになっている。

父は、私が父に不満らしいことを言ったりすると、必ず次のせりふで切り返してくる。

「君は昔からそうだ。そうやって、理由もないくせにつつかかってくるじゃないか」

私は、またそこでゲンナリしてしまう。本当は理由があるのだ。何でわからないのか。そこで父との会話が途切れてしまう。そうして私は、母にべったりくっついて「父なんてイラナイ」といついつ言ってしまうのである。私以上に、父の中に残る空白の二年間なのである。

それでも何とか、小学校にあがる頃には、父との会話も少しずつ増えてきた。

私たち三姉妹は、近所の公立の小学校に通っていたが、私たちの日常の面倒は母方の祖父母がみてくれていた。

私は、母と祖母にとっても可愛がられていたので、家庭の中での敵は父にとどまらず、みーちゃん、あーちゃんにもよく標的にされた。

みーちゃんとあーちゃんは、とても仲が良くて、今思うと最高にユニークなコンビだった。

小さい頃の井上家の三姉妹はそれぞれこんな感じだった。

みーちゃんは、小さい頃から家族思いの神経質な性格。

あーちゃんは、動物が好き。男の子の子分をひきつれ、ズボンしかはかなかった。そして何よ